

# 教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)  
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

## トラブルは解決よりも解消 (前編)

教室の後ろで喧嘩をしている子どもがいます。二人の間に割って入ると、互いに、「こいつが悪い!」と相手を責め、自分は正しいとアピールします。

今回はお互いが正義を主張する喧嘩にどう対応するかを書きます。

ポイントは、「トラブルは解決よりも解消」です。

### 1 喧嘩の原因は「置き勉」

文部科学省は2018年9月6日付事務連絡で「児童生徒の携行品に係る配慮について」を各都道府県教育委員会などに発出しました。

これによって「置き勉」が認められることになりました。

私のクラスではロッカーに「置き勉」をして下校し、翌日の登校後にその日に使う教科書等を机に入れる(用意する)ことにしています。

ある日、「置き勉」が原因で喧嘩が起きました。この日は6時間授業なので、ロッカーに「置き勉」は残っていないはずなのですが、A君は置いたままにしていました。

それを見たB君が「社会の教科書があるよ」と伝えました。本当は「ロッカーに置き勉があったらいけないんだよ」と言おうと思ったのですが、それでは角が立つので、「見たまま」を教えたのです。

A君は素直に過ちを認めていればよかったのですが、「社会じゃないよ。理科だよ」と言い返しました。

次の時間は理科です。「置き勉」の一番上は確かにそれになっています。A君の言ったことは

間違っていない。

B君は見間違っただけです。しかし、A君にすれば事実と異なります。しかも、「置き勉」を注意されたという負い目があったので、B君を嘘つき」と罵倒したのでした。

B君は善意で、しかも相手が感情的にならないように配慮したつもりです。それなのに自分の善意が誤解され、挙げ句の果てには嘘つき呼ばわりされ、腹立たしくなったB君は「なんだよ」とA君に詰め寄りました。

この後言い合いになり、互いに手が出ってしまったのです。

### 2 事情を聞く場の設定

まず二人から事情を聞く必要があります。

#### Q1 先生は、どのような形態で話を聞きますか。

- ① 二人一緒に聞く。
- ② 一人ずつ別々に聞く。

①は火に油を注ぐようなものです。仲裁直後は興奮しています。両者とも自分が正しく、悪いのは相手だと思っています。

敵意をもっている相手がすぐ近くにいたら、自分を冷静に見つめることができなくなり、相手を攻撃することに意識が向きます。

そうになると、教師の対応は二人を冷静にさせることから始まり、話を聞く時間が長くなります。そして、解決を翌日に持ち越すこととなります。帰宅した子どもはこの件を保護者に訴えるので



しょう。そのころには少し冷静になっているので、自分にとって都合の悪いこととそうでないことを弁別できます。つまり、「自分のフィルター」を通して保護者に話をするわけです。保護者はわが子の話を信じ、それが事実だと認識します。その結果、「昨日の件を先生はどのように解決なさるのでしょうか。うちの子の話を知ると、非は相手のお子さんにあるように思えます」という問い合わせが来ることも考えられます。場合によっては、「先生はうちの子を悪者扱いしている」と担任の対応に納得できず、「先生は何もしてくれない」と担任の指導に不満をもち、クレームとなるかもしれません。翌日から担任は、子どもだけでなく保護者の対応にも追われることとなります。そうならないためにも、②のように個々から話を聞くようにします。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。  
ベテラン先生によるケーススタディです。  
こんな時、あなたならどうしますか？



この時、担任と子どもが座る位置に配慮します。どちらかが黒板を背にするのではなく、向かい合って並びます。こうすると、互いの表情が見えるだけでなく、教室にいる友達も視野に入りま

3 話を聞く場所

二人から個別に話を聞くことにします。

Q2

先生はどこで話を聞きますか。

- ① 教師と子どもだけの空間を作るため、別室。
- ② クラスの子どもたちがいる教室。

話を聞くのは、①のように別室が一般的です。そこにいるのは先生と子どもの二人だけです。子どもは自分の立場から喋ることができません。したがって「自分は悪くない。悪いのは相手」という視点になります。

子どもは自分にとって都合のよい話をしていくことはわかっています。しかし、叱られるようなことはあえて触れません。

結果、事実が脚色されることになります。

今回のように友達が周知している場合は、②のように人の目がある教室で聞きます。

②のように冷静な子どもは、教師が仲裁に入った時点で喧嘩は終了しています。今回のケースではB君です。「置き勉」を注意しなければよかつ

Q3

先生はどちらから先に話を聞きますか。

- ① 強く不満を訴えているほうから聞く。
- ② 冷静なほうから聞く。

す。そのため別室のように、自分の視点、自分のフィルターを通した話をするわけにいきません。友達が、先生と自分の会話を遠巻きで見ているからです。

自分の話は友達に聞こえます。事実と異なることを言えば、冷たい視線を向けられたり、「違うよな」と指摘されたりします。

子どもは自分の気持ちを伝えようとしてはいますが、事実を曲げるようなことはしなくなります。

人の目を意識することで、自分本位、感情的に捉えていたトラブルを理性的に整理する時間になります。

4 どちらから先に話を聞くか

指導する子どもは二人ですが、個別に喧嘩の経緯を聞きます。言い分や感情的なことも含めて充分に聞きます。

実は、充分に聞くこと以上に大事なことがあります。それは、両者の感情のレベルを同じにするということです。

そういうことも含めて、どちらと先に話をすればよいのかを考えてみましょう。

た」と自分の善意を後悔しています。それくらい冷静です。話を聞く順番が後になっても心境の変化はありません。

一方、感情的になっている子どもは、冷静な子どもの話を先に聞くと、「先生はあいつのほうを大事にしている」と僻みます。

また、「自分の都合のよいことだけを先生に言うから、先生は相手の言うことを信じる」と誤解します。

その結果、教師への不満が加わり、さらに感情的になっていきます。こうなると教師の話を聞かなくなります。

そこで①のようにします。子どもの話に口を挟みたくなくてもひたすら聞き役に徹します。

ただし、確認は行います。例えば、「叩かれた」と言ったら、「どこを」「何回」「どれくらいの方で」と事実関係を確認します。思いはそれぞれですが、事実の一つです。時には、「それは痛かったね」と子どもの気持ちを代弁します。

子どもの気持ちに寄り添うことで、不満の塊が溶け、子どもは冷静さを取り戻します。

こうして一人目の聞き取りを終えたら、他方も同様な場所で話を聞きます。

冷静にしても、やはり子どもです。周りの目が気になります。特に喧嘩相手の声が聞こえると目が動きます。

そんな時は、子どもの肩に手を置いて、「話を聞かせて」とこちらを向かせます。教師とのスキップが、冷静さを取り戻す助けとなります。

紙幅がきました。この後の対応については次号に記します。